



Title	Epidemiology of bronchiectasis at a single center in Japan: a retrospective cohort study
Author(s)	安部, 祐子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/103082
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨
Synopsis of Thesis

氏名 Name	安部 祐子
論文題名 Title	Epidemiology of bronchiectasis at a single center in Japan: a retrospective cohort study (日本の単一施設における気管支拡張症の疫学：後方視的コホート研究)
論文内容の要旨	
〔目的(Objective)〕	
<p>日本を含むアジアにおける気管支拡張症（BE）は未だ不明な点が多い。囊胞性線維症（CF）は、欧米諸国で大きな注目を集め、数多くの研究が行われている一方で、非囊胞性線維症のBEは、診断の困難さ、その不均一な性質および治療選択肢が限られているため顧みられず、長らく”neglected disease”とされていた。BEの臨床的特徴と治療効果、特に非結核性抗酸菌（NTM）感染とその予後の影響について理解を深め、増悪歴のないBEにおけるマクロライド系抗菌薬の長期使用の効果を明らかにすることを目的とした。</p>	
〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕	
方法：	
<p>2012年1月1日から2023年8月31日までにBEと診断された患者の診療録を単一施設で後方視的に解析した。選択基準は国際的なコンセンサスに基づき、BEと一致する病歴（咳嗽、慢性の喀痰、および/または再発性呼吸器感染症）および胸部CTで1葉以上の気管支拡張を示している場合に登録し、既知の囊胞性線維症によるBEや肺線維症に伴う牽引性気管支拡張、18歳未満を除外とした。観察期間中の重症増悪および死亡を記録し、患者特性および全生存期間、初回増悪および死亡までに影響を及ぼす因子を分析した。加えて重症増悪歴のない患者におけるマクロライド長期使用の影響を推定した。</p>	
結果：	
<p>1044名のBE患者のコホートとなり、重症増悪率は22.3%で、3年間の死亡率は3.2%であった。診断からの経過観察期間（IQR）の中央値は27.8ヶ月（5.6–56.7ヶ月）であった。患者は女性（n = 807、77.3%）が多く、年齢の中央値は72.0（IQR 63.0–77.0）歳、BMIの中央値は19.3（IQR 17.5–21.4）kg / m²であった。注目すべきは、このコホートにおけるNTM感染の有病率が高いこと（n = 410、39.3%）である。NTM感染は、最初のBE重症増悪までの期間（p=0.5676、調整ハザード比=1.11）および死亡率（p=0.4139、調整ハザード比=0.78）のいずれにも関連していなかった。NTM群と比較し、非NTM群では炎症マーカーの有意な上昇（CRP（p=0.0301）、血中好中球数（p=0.0273））がみられた。緑膿菌のコロニー形成は、非NTM群でより高頻度であった（p=0.0003）。CTでのFACEDスコアと疾患の範囲は、NTM群で有意に大きく、BMIは有意に低かった。非NTM群で過去2年間増悪のないBE患者のうち、38.2%がマクロライド系抗菌薬を長期間投与されており、初回の重篤な増悪までの期間は必ずしも延長しなかった（p=0.4517、IPW p=0.3555）。</p>	
〔総括(Conclusion)〕	
<p>本研究は、日本におけるBE患者を対象とした大規模疫学コホート研究である。BEの疫学を明らかにし、NTM感染の存在が必ずしも重篤な増悪や死亡率などの予後を悪化させないことを示した。さらに、BE増悪歴のない軽症例への長期にわたるマクロライドの使用は増悪までの期間を延長しない可能性があり、慎重に検討するべきである。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名)		安部 祐子
論文審査担当者	(職)	氏 名
	主 査 大阪大学教授	熊 伊 浩
	副 査 大阪大学教授	新 本 律
	副 査 大阪大学教授	今 井 邦 石

論文審査の結果の要旨

気管支拡張症（BE）は不明な点が多く、非囊胞性線維症のBEは、診断の困難さ、不均一な性質および治療選択肢が限られているため軽視されてきた。そのようなBEの臨床的特徴と治療効果、予後の影響について理解を深める目的で研究がおこなわれた。

1044名のBE患者が登録され、重症増悪率は22.3%で、3年間の死亡率は3.2%であった。このコホートにおいてNTM感染の有病率は高い(39.3%)結果であった。陰影の広がりの範囲は、NTM群で有意に大きく、BMIは有意に低かったが、最初のBE重症増悪までの期間および死亡率のいずれもNTM感染と関連していなかった。この一因として、綠膿菌のコロニー形成が非NTM群でより高頻度であることや、好中球性炎症のマーカーが非NTM群で有意に上昇していた事の影響が推測された。また、増悪歴のないBEにおけるマクロライド系抗生物質の長期使用は増悪までの期間を必ずしも延長しない可能性があり、慎重に検討するべきであると結論付けた。

本研究は日本におけるBE患者を対象とした今までの報告にない大規模疫学コホート研究であり、学位の授与に値すると考えられる。